

共生・公正・創造



# 東日本タイムズ号外

<http://www1.biz.biglobe.ne.jp/~JRTU-HWU/>

ジェイアール東日本労働組合  
〒108-0014 東京都港区芝5丁目33番36号  
TEL(NTT)03-3453-2107 (JR)057-2290  
発行者/今井 伸 編集者/平 憲治

## 【シリーズ27】

### JR東日本労政の問題点回顧

#### 責任を問われるべき住田・松田・<柴田>・松崎体制

JR東日本の初代社長は運輸省出身の住田正二氏で、その後は国鉄出身の松田昌士氏が二代目社長に就任した。三代目が現社長の大塚陸毅氏で松田氏と同じく国鉄出身である。住田初代社長と松田2代目社長はその在任中、JR東労組初代委員長松崎明氏との間にJR東日本革マル問題ウォッチャーたちが「相互支援体制」と呼ぶ“強固な親密関係”を構築し、松崎氏及び松崎氏率いるJR東労組運動を評価・擁護する発言をしばしば行っていたことは周知のことである。【…中略】

ところで、革マル派は、平成12年4月中旬に「松田社長退任、大塚副社長昇格」のJR東日本経営新人事内定が新聞報道されるや、突如、「現代古文書クラブ」名で同派発行の「主張」4月25日号【葛西-大塚の会社派フラク（キャリア組インフォーマル組織）による労組破壊策動を打ち破ろう】や、【JR東・大塚新経営陣の新たな労組破壊攻撃を打ち砕け！】と題する革マル派ホームページを用いてJR東日本「大塚新体制」、との対決姿勢を鮮明に打ち出した。

当時の諸資料によって、「大塚新体制」の発足を前にした革マル派の認識と言説の一部を要約すると、次のとおりである。

取締役最高顧問の住田が単なる相談役に格下げになり、代表取締役社長の松田が代表権のない取締役会長に棚上げされ、葛西直系の大塚が社長に昇格するということは、「東労組・JR総連破壊攻撃を本格的に開始する敵側の体制が確立された」ということを意味するものだ。

新社長に内定した大塚は、JR東海社長の葛西と気脈を通じて、従来のJR東日本の労使関係を覆すために、配下のキャリア組インフォーマル組織を使ってJR東労組破壊行為を隠然と行ってきた人物である。

およそ一企業の経営者人事に、しかも「新社長内定」の新聞報道がなされただけという流動的段階で、左翼過激派集団革マル派がここまで関心を示し、踏み込んで来たのは前代未聞のことであった。

ともあれ、このような不可解というか一種不気味な革マル派の行動に対し、JR東労組は素早く「大塚新社長歓迎・支持」の意向を表明、いつしか革マル派も沈黙に転じ、同年6月、JR東日本大塚新体制が発足した。

< JR東日本労政『二十年目の検証』189ページから191ページより抜粋 >

# 民主化の声・声・声・・・

2005.12.13 その27

## (読んではいけない?) 「小説労働組合」の読み方! (7)

～ JR総連傘下「九州労」大量脱退事件の真相～



\* 数カ月が過ぎた。取り組みは南国鉄道会社と会社組合の攻撃を受け、組織は三分解させられた。明らかに取り組みそのものは失敗に終わった。大元は反省の弁ひとつ言うこともなく、率先した鉄道連合幹部も取り組みの総括さえしないまま時が過ぎた。南国鉄道労組のもぐり込み戦術の失敗の原因は、鉄道連合から南国鉄道労組に派遣された北本州鉄道労組信越地本出身の小森と南国鉄道労組の新藤委員長が、大元の指示を誤ってとらえたばかりでなく、拙劣な戦術上の指導にあるとされた。以降、誰も何もなかったかのように、一切この問題に触れはしなかった。(p. 37)

\* 南国鉄道労組の会社組合へのもぐりこみ戦術は、もうひとつの問題を惹き起こした。この問題に、前から鉄道連合に攻撃をかけていた労働者党が、「反階級的行動である」との声明を發表し、責任者とみためた鉄道連合役員の一を拉致するという事件が起きた。直ちに鉄道連合は労働者党に役員の新放を求め、組織を挙げてたたかう意思を表明した。労働者党は鉄道連合幹部の要求を無視し、さらに鉄道連合への攻撃をエスカレートさせた。(p. 37～38)

東労組の組合員が配っている本であり、解説書まで出回っているわけであるが、告訴好きの団体のことを考え個人名は極力避けると、おそらくこの文脈の読み方は次のとおりであろう。

【大元( M氏) 本人が考案、直接指示した「もぐり込み」戦術は惨めな失敗に終わったことが明白であるのに、大元( M氏) からは反省の弁一つなく、指示通りに動いた鉄道連合幹部たちも沈黙、問題の正式な総括が一切行われぬまま時が流れ、やがて、「九州労もぐり込み戦術失敗の原因は、鉄道連合から九州労に指導派遣された北本州鉄道労組信越地本出身のMY氏と九州労K委員長が、大元( M氏) の指示を誤って理解したこと及び両名の拙劣な戦術上の指導性にある」と内部整理された。以降、誰も何事も無かったかのように、一切この問題に触れることはなかった。そして、平成12年11月、JR総連OB坂入充氏拉致・監禁事件へと発展していく】

大元( M氏) の判断ミスによる九州労の「会社組合へのもぐり込み戦術」失敗問題は、大元( M氏) が責任をとることなく、北本州鉄道労組信越地本出身のMY氏と九州労K委員長にかぶせられた。教祖様大元( M氏) は、いかなる場合であっても絶対に悪くないのである。九州労の組織を三分解させてしまったという致命的な大失敗でも、反省の弁もない大元( M氏) はもはや組織のガンである。